様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００７２６

研究課題名（和文）大学生による英語絵本読み聞かせが読み手と聞き手に与える効果

研究課題名（英文）The Effects of English Picture Book Read-Aloud Volunteer Activities by University Students

研究代表者
大津　理香（Otsu, Rika）

茨城大学・全学教育機構・助教

研究者番号：１０７０８０１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語絵本の読み聞かせ活動が大学生ボランティアの情意面と英語力、小学生と教師の反応に与える影響を調査した。2022年度と2023年度に15名の大学生が参加し、月三回の練習と月一回の小学校での読み聞かせを実施した。活動前後で英語力テストとビデオ評価を実施したが、ビデオ評価において読み聞かせパフォーマンスの向上が確認された。アンケートでは、全員が活動を有意義と評価し、英語使用機会の増加を感じたことがわかった。一方、二校の小学生の98%（対面実施）と84%（オンライン実施）が活動を楽しみ、続けてほしいと回答。教師も児童の積極的な参加を評価しており、この活動が快く受け入れられたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、英語絵本の読み聞かせが大学生と小学生の双方に教育的効果をもたらすかを検証することで、英語教育の方法論と動機づけ研究に一つの示唆を与えるものである。大学生は、実践的に英語を使う機会を得、英語絵本の読み聞かせパフォーマンスを向上させた。また、子どもたちとの交流により学習意欲の向上もみられた。さらに、地域貢献として学生の社会的責任感も育成した。小学生は、同じ日本人の「学生さん」の英語での活躍や英語絵本の世界に触れることで、英語や異文化への興味と学習意欲を育む機会を得た。この研究は世代を超えた協同学習の可能性を示し、継続可能な教育活動のモデル構築に向けた重要な一歩となった。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the effects of English picture book reading-aloud activities on university student volunteers' affective aspects and English proficiency, as well as elementary school students' and teachers' responses. 15 university students participated in 2022 and 2023, practicing three times a month and reading aloud at elementary schools once a month. English proficiency tests and video evaluations were conducted before and after the activity. Improvements in reading-aloud performance were confirmed in the video evaluations. Surveys revealed that all students found the activities meaningful and felt they had more opportunities to use English. Among 4th graders of two elementary schools, 98% (in-person) and 84% (online) enjoyed the activities and wanted university volunteer readers to continue this activity. Teachers also noted active student participation, indicating positive reception.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語絵本の読み聞かせ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、大学生に授業外で英語を使う機会と地域で活躍する機会を提供することを狙いとして着想された。2020 年度からの小学校英語教育の改革に伴い、英語絵本の読み聞かせが注目され、多くの研究が聞き手である子どもたちの英語習得に焦点を当てている。しかし、読み手となる大人や大学生への効果については十分に研究されていない。そこで、大学生による英語絵本の読み聞かせ活動が、学生の英語力と情意面にどのような影響を与えるかを調査し、大学生の英語教育の一つの方法として活用する可能性を探ることにした。

ただし、この活動が成功するためには、聞き手である小学生も楽しみながら英語への興味や理解を深める機会となる必要がある。読み手と聞き手の双方が楽しみつつ英語力を向上させることができる活動が望まれる。以上の背景から、英語絵本の読み聞かせ活動が読み手と聞き手の双方にどのような効果をもたらすのか、そして双方にとって望ましい活動のあり方とは何かを学術的な「問い」として研究を始めた。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の二つを明らかにすることであった。①大学生による英語絵本読み聞かせ活動が学生の英語力と情意面に与える影響、②読み聞かせが小学生とその教師にどのように受け止められるのか。これにより、実践的な英語教育の方法としての読み聞かせ活動の有効性を検証することを目指した。

これらを調査することで、大学生には普段の座学的英語学習だけでなく、地域貢献をしつつ実際のコミュニケーションを通じて、実践的な英語力を身につける機会を提供できると考えた。また、小学校の児童には英語や英語絵本の世界を知る機会を提供し、小学校の教師には英語指導の支援の一つの手立てとなる可能性があると考えた。英語絵本を使った英語教育の新しいアプローチを示し、学生と小学生の双方にとって有益な活動を提案することが本研究の目標であった。

３．研究の方法

本研究では、英語絵本の読み聞かせ活動が、大学生の英語力と情意面に及ぼす影響を明らかにすることを目指した。英語力については、音声面やインタラクション面を含む多面的な側面（リスニング、語彙・文法、リーディングなどの受動的スキルを含む）に焦点を当てた。

2022 年度と 2023 年度に大学の学生ボランティア合計 15 名が、大学の学期中に近隣の小学校二校の 4 年生に月 1 回（各年度 8 回程度）英語絵本の読み聞かせ活動を行った。一校は対面で、もう一校はオンラインでの活動であった。これに先立ち、月に 3 回のミーティング（各年度 20 回程度）を行い、発音や読み聞かせの練習を行った。

ボランティア学生の活動前後の英語力の変化をみるため、CASEC テストおよび CASEC SPEAKING テストを実施した。また、活動前後の読み聞かせの実演をビデオ撮影し、二人の評価者によってビデオ評価を行った。それらにより得られた 15 名の活動前後の点数の平均値を比較した。さらに、学生の活動前後の情意面を調査するため、アンケート調査を実施した。

ボランティア先の児童や担当教師へは、活動前後での英語や大学生に対する意識を明らかにするため、アンケート調査を行った。

４．研究成果

前述の通り、学生の英語力とパフォーマンスの変化を測るため、活動前後に英語力テストとビデオ評価を実施した。また、アンケートで学生の意識も調査した。英語力テストでは、CASEC テストと CASEC SPEAKING テストの両方において、活動前後に大きな変化は見られなかったが、ビデオ評価の結果において、発音やアクセント、およびイントネーション等に改善が見られた。また、聞き手を意識した読み聞かせのパフォーマンスの向上が確認された。

学生への事前のアンケートでは、ボランティアへの参加を決意した主な理由に、ほぼ全員の学生が「英語力を伸ばしたい」と回答していたが、事後のアンケートで、全員の学生が実際に発音やアクセントおよびイントネーション、会話力が改善したと感じ、以前より自分の英語に自信がついたとも回答したこともわかった。さらに、全員が活動を有意義であったとし、「英語を使う機会が増えた」「もっと英語を学びたい」「英語を使う機会をさらに増やしたい」と感じたことがわかった。自分が学んだ英語を活かせたことや、小学生の期待に応えようと練習を頑張れたこと、そして小学校で読み聞かせしたときの成功体験が、大学の英語の授業では得られない貴重な経験となったとの記述もみられた。

小学校の児童や教師からも肯定的な反応が得られた。事前の調査で英語絵本の読み聞かせが未経験な児童が約 75%いたが、2022 年度と 2023 年度に二校の 4 年生児童合計 280 名に読み聞かせを行ったところ、対面で実施した児童（173 名）の 98%、オンラインで実施した児童（107 名）の 84%が「大学生による英語の読み聞かせが楽しかった」と回答し、対面での 98%、オンラインでの 86%が「続けてほしい」と答えた。主な理由としては、ストーリーの面白さや大学生の声やジェスチャーを使った工夫により理解ができたことが挙げられた。教師からも事前のアンケートでは「英語が難しくてついていけない児童が多く出てしまうのでは」と懸念が示され

ていたが、事後のアンケートでは「子どもたちが学生と自然な英語でやりとりできていたようだ」「子どもたちが学生の読み聞かせを毎月楽しみにしていた」等と記述があり、この活動が快く受け入れられていたことがわかった。

以上の通り、研究課題として挙げていた二点：①大学生による英語絵本読み聞かせ活動が学生の英語力と情意面に与える影響を明らかにすること、②読み聞かせが小学生とその教師にどのように受け止められるのかを明らかにすること、について、①は英語の実力テストにおいては特に変化はみられなかったが、読み聞かせのパフォーマンスに改善が見られ、情意面ではこのボランティア活動が自分の英語や英語学習に対して前向きな気持ちを引き出したと考えられる。②については、小学校側が学生ボランティアによる英語絵本の読み聞かせ活動を歓迎していたと解釈できる。

一方で、本研究には課題も残った。1つはプラクティカルな問題で、大学生が週1回のミーティングに割ける時間が限られており、練習ミーティングの日時を決めにくい点である。全員の参加が難しい場合は、2回に分けて1回は対面で、もう1回はオンラインで対応したが、これは指導する教員(筆者)の負担となった。他にも、小学校側に許可頂いた時間が朝の読書時間（8時10分から8時25分）で、大学の1時限が始まる時間に近かったため、1時限のある学生や教員にとって時間的な余裕が足りなかった。

2つ目は、研究デザインの問題である。本研究と活動の性質上、多くの参加者を集めることが困難で対照群もなく、特にビデオ評価における改善が本活動によるものなのかまたは他に要因があるのかは明らかにできなかった。さらに、評価者二名への評価方法に関する説明が不十分だったため、事後の評価において評価者間の信頼係数が低くなった。対処法として、著者が評価者として加わり、評価者間の信頼係数が高くなった方の評価者との平均値を採用することとなった。

3つ目は、小学校に関する課題である。絵本の読み聞かせが楽しくなかったと答えた児童が、対面で実施した学校からもオンラインで実施した学校からも数名ほどいたが、特にオンラインで実施した学校の児童は「見えづらかったから英語もわからなかった」と回答している。画面上では絵本が揺れるのが目立ったり、学生が身振り手振りで子どもたちの理解を支援することができなかったり、音声が聞きづらかったりと問題があった。同様に、対面でも角度によって絵本が見づらくなることがあったようだ。今後の活動においては、児童の理解を高めるためのさらなる工夫や技術的な改善が必要である。

他にも、ご協力頂いた小学校の先生方から、「現場は非常に忙しいので月1回のペースは厳しかった」というご意見を頂戴した。今後、先生方と事前に十分打ち合わせをし、双方にとって無理なく続けていける活動を目指して、活動頻度や時期や時間を検討していく必要がある。

本研究は、英語絵本の読み聞かせ活動が大学生と小学生の双方に与える影響を調査するものであり、日本国内では定期的に大学生が小学生に英語絵本を読み聞かせるというボランティア活動は未だみられない。2021年度から2023年度に実施した本研究の成果を、2024年3月にTeachers of English to Speakers of Other Languages（TESOL）の国際学会でポスター発表する機会に恵まれた。学会に来場された方々からは、英語学習者である大学生と小学生が交流し、英語を絵本から学ぶという点やボランティア活動としての独自性に対して関心が寄せられた。

今後の展望として、活動の継続と拡大を目指し、より多くの大学と小学校に広げることができればと考えている。本研究で明らかになった課題を念頭に置き、教員の負担とのバランスを考慮した学生の参加しやすい環境の整備、研究デザインの改善、小学校の先生方との連携強化などに取り組みながら、より良いモデルを提案し、世代を超えた英語学習者の協同学習の可能性を探っていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 大津理香	４．巻 6
２．論文標題 茨城県の公立図書館における英語絵本の読み聞かせ活動－科研費基盤研究（C）中間報告－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 茨城大学全学教育機構論集 大学教育研究	６．最初と最後の頁 133 - 140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大津理香	４．巻 25
２．論文標題 大学生が英語絵本の読み聞かせ活動を通して得たものー常磐大学2015年度の活動からー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 LEORNIAN	６．最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大津理香・辻川美和・佐竹正夫	４．巻 5
２．論文標題 大学生が英語絵本の読み聞かせ活動を通して得たものー常磐大学における3年間の試みー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 茨城大学全学教育機構論集	６．最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34405/00020013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Rika Otsu
２．発表標題 The Influence of Reading English Picture Books by University Students
３．学会等名 The Japan Association for Language Teaching (JALT)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Cecilia Ikeguchi, Tim Cook, Deborah Grow, Naoko Ochiai, Rika Otsu, Naomi Takagi
２．発表標題 Towards an Effective Implementation of EFL Education in Japan
３．学会等名 The Japan Association for Language Teaching (JALT)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Rika Otsu
２．発表標題 English Picture-Book Reading Volunteer Activities by University students
３．学会等名 Teachers of English to Speakers of Other Languages (TESOL)（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関